

令和三年度 入学試験 第一回午前 国語

京華女子中学校

【一】 漢字に関する以下の問いに答えなさい。

問一 ①～⑥の——線部のカタカナをそれぞれ漢字に直しなさい。

- | | | |
|---------------|-----------------|-----------------|
| ① ホンリヨウを発揮する。 | ② 発表会で悪役をエンじる。 | ③ 他人の失敗をセめる。 |
| ④ 失敗のゲンインを探す。 | ⑤ 試合のシュドウ権をにぎる。 | ⑥ ケットウ書付きの犬を飼う。 |

問二 ①～⑥の——線部の漢字の読みをそれぞれひらがなで答えなさい。

- | | | |
|--------------|----------------|-------------------|
| ① 勇気を奮って話す。 | ② 冬至の日にゆず湯に入る。 | ③ マラソンで心肺機能をきたえる。 |
| ④ 世界の国旗を調べる。 | ⑤ 郷土料理を食べる。 | ⑥ お互いに欠点を補う。 |

【二】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

『本当の学びというのは、学校の授業や受験勉強などに限定されるものではありません。その意味で、人間の一生は、学びの連続であると言っていいくらいです。何歳でも学ぶことができて、常に学びがあるからこそ、生きていて面白いと思えるのです。』

「発達」という言葉を、よく表面的な理解で「できないことができるようになること」ととらえることがあります。

【ア】 学んだことによつて、自分の中にある世界がさらに深まっていくとか、やってきたことの意味がまた違ちがった角度でわかつてくるとかいうことは、何歳になつても起こります。

【イ】 たとえば、記憶が曖昧になつたり、運動機能が落ちていつたり。

【ウ】 そうやって、体や心が成長、進化していくことが本当の発達であつて、発達は死ぬまで続くのです。

【エ】 先ほどのような発達のとらえ方をするとしたら、年を取ると後退していくから、発達は若いころに限定されたもの、ということになつてしまいます。

【オ】 けれども、人間は年を取ると、できないことも増えていきますよね。

だから、別の見方をするならば、学びというのは、人間の発達をいろいろな角度で促うながす行為である、というふうにも言えます。中学生や高校生のころの学びというと、学校や受験の勉強に結びつけて考えがちなだけけれども、それらを取とつたもつと深はいところにあるのが、本来の学びであり、人生を耕すために学ぶということでもあります。だから仮に、中高生のときに十分に学べなかったとしても、それで一生がダメになつてしまうということは、原則ないのです。

何歳になつたとしても、自分はまだ未熟だし、知らないことだらけだから、もつともつと学んでみたい。もつと自分の世界を豊かにしてみたい、と思う姿勢さえあれば、学びは続いていくのです。そのことを、ぜひ若いうちに知つていてほしいのです。

「学び」には、三つの段階があると言われています。

最初の段階は、いろいろな知識に触れて、物の仕組みや歴史など、何かを知ること。これを「端緒知」と呼びます。次に、端緒知をきっかけにして、それがなぜ起こつたのだろうとか、どうしてこういう現象が起こるのだろう、などと自分なりの疑問や課題を持つて、いろいろと調べたり、人とディスカッションしたり、記録して分析したりして、知識を深めていくことを、「実践知」と呼びます。「深め知」と言つてもいいでしょう。

たとえば、第1章で、源頼朝が鎌倉に幕府を立ち上げたけれども、どうして朝廷のあつた京都から遠く離れたところに幕府を開いたのだろうか、という話をしましたね。この例で言うと、頼朝が鎌倉に幕府を立ち上げたという事実を知ることが「端緒知」で、どうして鎌倉だったのだろうかと疑問に思つて調べたり、考えたりしていくことが「実践知」ということになります。

そして、それらがわかつたことで「歴史には興味がなかったけれど、なんだか歴史つて面白そうだな」と歴史に対する見方が変

わったなど、その人の人格形成になんらかの影響を与えるような学びに発展していく。それを「人格知」と呼びます。

このように、本当の学びというのは、「端緒知」「実践知」「人格知」と三層になって深まっています。

僕は実際、どうして京都から遠く離れたところに幕府をつくったのだろうと不思議に思っ、東京に出てきたときに、鎌倉へ行って見たことがあります。そこは切り通し^{注1}になっていて、確かに攻め込みにくい場所でした。頼朝が攻め込みにくいところに幕府の拠点を^{きよてん}つくったというのはよくわかるのだけれども、朝廷を守るためじゃないな。だったら、幕府というのはいったい何なのか。幕府ができるということは、何を意味するのか。そんなことを考え、ずっと疑問に思っていました。

僕らが学生のときには、こういうことをちよつと調べようと思っても、本格的な歴史の本を買わないと調べられませんでした。でも今は、インターネットである程度のがわかって、さらに調べたいとなったら専門書を読もうというように、いろいろな選択肢^{たくし}があります。その点ではとても便利な時代になったと思います。

それを生かして、学校で教えてくれることの中には、必ず「なんで？」という問いが隠れているはずだ、というふうに考えてみる、疑ってみる、調べてみる。学校で同じことを習ったとしても、単なる知識で終わってしまうのか、人生を変えてくれるような深い学びとなるか、学ぶ側の意識次第^{しだい}で、それはまったく違ったものになると思うのです。

前項の「学びの三段階」について、もう少し、別の例で言い換えてみましょう。

やったこと、経験したこと、学習したことなどで、何らかのスキル^{注2}が身についたとか、新しい知識を覚えた、ということがありますね。たとえば、スマホにはこんな便利な機能があつたんだというのを知った、というのも新しいスキルです。

そして、それを使ったら、生活が便利になったとか、今までとは違った人とコミュニケーションが取れるようになったとか、実践的なレベルで生活行為が広がっていく、というのが二つ目の学びです。そして、結局学んだことで、自分の生活そのものが変わっていく、というのが三つ目の学びになります。

^{注3} SNSを始めたら、いろんな国に仲間ができて、その友だちを訪ねて実際にその国に行ってみたとか、あるいは、その国が抱えている国際問題を知ることになって自分の進路を見直したとか、皆さんの身近なところにも、そういう事例はたくさんあるはずです。

こんなことを話している僕だって、皆さんと同じです。

a、農業について、今までは表面的なことしか理解していませんでした。ところが最近、さまざまな農業のプロと接する機会に恵まれて、これまでの認識^{にんしき}がガラッと変わりました。

野原というのは、肥料も何もあげないのに、毎年豊かに草が茂りますよね。**b**、本来あるべきところにあれば、肥料なんかなくても、植物は自分で上手に育っていける力を持っている、ということです。

それは、こんな仕組みだそうです。生えていた草が枯れると、土の中にあつた根の部分に空洞^{くうどう}ができます。そこが水や空気の流れ道になって、たくさん微生物が棲みつくようになる。すると、どんどん土が柔らかくなって、微生物が豊かに生息する土になっていく。すると養分をたっぶり含んだいい土ができ、周りの植物は元気に育っていきます。

ところがそれを下手に耕してしまうと、せっかくできた根っこの空洞が潰されてしまい、自然の力でできた循環^{じゅんかん}が断ち切られてしまう。微生物の生態系も壊されてしまう。だから本来、農業は耕さないほうがいい、ということです。その方法は、自然農^①というふうに呼ばれています。

一方で、現行の農業のように同じものを一斉^{いっせい}につくろうとすると、同じ栄養分が地中から失われてしまうので、肥料で栄養分を補わないといけなくなる。それは、薬に頼って生きている人間と同じようなもので、そうなると作物も弱っていきます。そのままでは作物は虫にやられてしまうから、今度は農薬をたくさんまかないといけなくなる。同じものを一斉につくることは、一見、効率がいいように思えけれども、本来はなくてもいい肥料や農薬を使わなくてはいけなくなって、土の生命力を弱めてしまう、という事なんだそうです。

それを聞いて、僕はなるほどと思って、自分でもいろいろな作物を育ててみようとか、お店で買うときにもそういう考え方で育てた作物を選ぶようにしよう、というふうに行動が変化してきました。

私もこの年になって、ようやくそういうことに気づいたわけです。今まで学んできたことや経験してきたことがつながって、より深く新しい学びになる。そこで味わう感動が大きければ大きいほど、自分の考えや行動への影響も大きくなります。つまり、今まで学んできたことや経験してきたことは、すべて無駄ではないということ。そして、いくつになっても学びはあるということです。

「端緒知」「実践知」「人格知」というふうに、考える、実践する、交わるなどを含んで、「学ぶ」ということをイメージしていただければ、そういう目で見れば、つまらないと感じていた学校の授業も、違った見え方がするかもしれません。

本当に自分が知りたいと思ったことは、「本当かな?」「何でだろう?」とことんこだわって考えてみるのです。そう考えたら、あらゆる端緒知は、疑いの対象になるのです。

たとえば、「一十一二」というふうには、小学校一年生の時に習いましたね。そういうものだと思っていれば、当たり前と思うかもしれませんが、こんなふうと考えてみたら、それは成り立つでしょうか?

象一頭と鉛筆一本を足してください。そうすると、二になりますか? 象と鉛筆は足せますか? これが、鉛筆ではなく、象と猫だったら足せますか? だったら、足すとはどういうことなのでしょう。

小さな子どもだったら、象さんも鉛筆さんも森の中で楽しく歌って生活している、というファンタジックな世界を想像するかもしれない。それなら、象と鉛筆を足して二もありえそうです。同じ象と鉛筆でも、シチュエーションが変われば、足せるということですね。

一体、足し算が成り立つ世界というのは、何なのでしょう?

象と人間だったら足せますか?

それを、地球規模で考えてみたら、蟻と象も命を持っているという点では、仲間ですよ。世界の生き物たちの会議があつて、それぞれの種が一票ずつ持っているとしたら、その総票数はどのくらいになるのだろうか。その中で、人間が持っているのはわずか一票です。

そういうふうを考えていたら、数学は哲学なんです。僕はずっとそう思ってきました。足す・引くということが成立する世界は、厳しい同類基準をクリアしたもののだけなんです。

③ そんなとらえ方をしてみたら、いつもの学校の勉強も、また違ったものに見えてくるはずですよ。

中学・高校では、受験勉強型のテストの点数が高い人ほど、頭がいいと思われがちです。もちろん、そういう人がある意味では、高い能力を持っているということは間違いありません。記憶力がいいとか、それなりの理解力がある、ということでしょう。

c、そういう人が社会に出たとき、いい仕事をして周囲の人からも信頼されるかどうかは、また別の話です。

以前、ダニエル・ゴールマンの『EQ ころの知能指数』(土屋京子訳、講談社、一九九六年)という本が話題になりました。アメリカのある研究グループで、名門高校(プレップスクール)の卒業生たちが、三〇歳前後でどのような職に就き、どのくらいの収入を得ているかというアンケート調査を行ったところ、高校時代の成績と社会的成功には、あまり相関関係がなかったということです。

d、④ 社会的な成功者には、何が備わっているのか。精神的に落ち込んだときに上手に立ち直る力、元気がない人を上手に励ます力、仕事をきちんとこなすために自分でスケジュールを組み立ててマネジメントする力などでした。

具体的な例をあげると、こんなことです。大事なときにはしっかり集中するけれど、そうでないときには上手に息を抜いて活力を蓄える。チームで活動するときに、ほかのメンバーを上手に立てることができる。思い切った決断が必要なとき、勇気を持って英断を下すことができる。

社会的に成功しているのはこういった人たちで、それらの能力は、学力的な知力とは異なります。心理学的な言葉で言うと、「情動(強い感情)をコントロールするのがうまい人」となります。

たとえば、仕事をしていて、何かわからないことにぶつかったとき、正直に「ここがよくわからないです」と言えること。そこで格好つけて知ったかぶりをするような人は、ビジネスの第一線ではやっていけません。自分に正直で、常に他者に寄り添ってものごとを考えられるような、人間的な柔軟さや力強さこそが 필요한のです。

今では働き方が多様化し、もはや決まり切ったものをつくり続けなければならない、という時代ではなくなっています。新しいアイデアをどんどん提案し、時代のニーズにに合わせて柔軟かつ迅速に商品やサービスをつくっていかねばなりません。そういう局面において、役立つ能力が求められているわけです。

「頭がいい」という定義も、今までのように知能指数(IQ)が高いだけではなく、これからは心の知能指数(EQ)をもっと重視してこういうふうに変わってきているのです。

(汐見稔幸『人生を豊かにする学び方』による)

注 1 切り通し……山、丘などを切り開いて通した通路。

2 スキル……熟練した技術。

3 SNS……インターネット上の会員制サービスの一種。

4 シチュエーション……場面。状況。

5 マネジメント……経営などの管理をすること。

6 ニーズ……必要。要求。需要。

問一 【ア】く【オ】は文の順序が違っています。論理的に正しい順序にならばかえて、記号で答えなさい。ただし、【ア】は四番目にくるものとします。

問二

a
く
d

にあてはまる語を、次のアくオの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。ただし、同一の語を二度以上用いないこととします。

ア けれども イ また ウ たとえば エ では オ つまり

問三 — 線部①「自然農」、②「現行の農業」の説明として、最適なものを次のアくオの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア 自然農は、土壌の微生物を利用すれば、肥料がない状態でも植物は自力で育つことができるという考えのもと、肥料や農薬は使用せず、定期的に土を耕す農法である。

イ 自然農は、微生物の生態系を利用すれば、肥料がない状態でも植物は自力で育つことができるという考えのもと、害虫を駆除するための最低限の農薬のみを使用する農法である。

ウ 自然農は、自然の循環をいかし、肥料がない状態でも植物は自力で育つことができるという考えのもと、肥料を使用せず、土を耕すこともしない農法である。

エ 現行の農業は、同じものをつくり続けるため土から微生物や虫がいなくなり、農薬を使わずに作物が育つという特徴がある。

オ 現行の農業は、同じものを大量につくるため土の生命力が弱まり、二度と同じ作物をつくることができないという特徴がある。

カ 現行の農業は、同じものを一斉につくるため土の栄養分が不足して作物が弱り、必要以上に肥料や農薬を使わなければならないという特徴がある。

問四 — 線部③「そんなとらえ方」とはどのようなとらえ方ですか。「く」というとらえ方」に続くように、本文中から三十六字で抜き出し、最初と最後の五字を答えなさい。ただし、句読点・カギカッコなどの記号を含む場合は一字と数えます。

問五 — 線部④「社会的な成功者」の特徴を次のアくオから三つ選び、記号で答えなさい。

ア 人間的な柔軟さや力強さを持っている。

イ 記憶力がよく、理解力がある。

ウ どんなことでも知っている。

エ 学校で行うテストの点数が高い。

オ 情動のコントロールがうまい。

カ 「わからない」と正直に言える。

キ 学力的な知力を十分に持っている。

問六 次のアくオの中から、本文の内容にあうものを二つ選び、記号で答えなさい。

ア 本当の発達とは、「できないことができるようになること」である。

イ 自分は未熟だと自覚することで、有意義な学生時代を過ごすことができる。

ウ 今はインターネットで全てのことがわかる、大変便利な時代である。

エ 学校で習っていることを疑って調べてみることで、深い学びになる。

オ 今まで学んできたことはどこで役立つかかわらないと思えば、学校の授業は楽しくなる。

カ 今求められているのは、時代のニーズに合わせたサービスの提供に役立つ能力である。

キ 「頭がいい」という定義が、「知能指数の高さ」ではなく「心の知能指数の高さ」に変化した。

問七 〓線部「本当の学び」について説明した次の文の□にあてはまるを言葉を、本文中からそれぞれ指定字数で抜き出さない。ただし、句読点・カギカッコなどの記号を含む場合は一字と数えます。

本当の学びとは、1 (三字)、2 (三字)、3 (三字)の三段階にわかれて深まるもので、これまでの学びや経験とつながることによって自分の考えや行動に影響を与え、人間の4 (二字)を促すものである。

問八 K小学校のけいこさん、はなこさん、ゆうかさん、ちかさんの四人のグループは、「なぜ勉強をするのか？」をテーマとした特別授業に参加しました。次の会話はその時のものです。会話を読み、後の問いに答えなさい。

けいこ…今日の特別授業は色々と考えさせられたわね。これまで当たり前に学校があつて、勉強していたけれど、「どうして今私は勉強しているのだろう？」と考えることはなかったな……。

はなこ…私はあつたわよ。今勉強していることは将来何の役に立つのか、疑問を感じるわ。だから私は勉強は必要ないと思う。

ゆうか…私は将来いい高校や大学に入りたいから、勉強は必要だと思うわよ。

ちか…私は、将来美容師になりたいけど、まさか理科の勉強が必要だなんて思わなかったわ。技術さえあればいいのかと思つてた。でも確かに、ヘアカラー剤やパーマ剤を扱うし、頭皮についての知識も必要よね。私理科が苦手だから、自分の夢をかなえるためにも、勉強をがんばろうと思えたわ。

はなこ…けいこさんはどう思うの？

けいこ…私は必要か不必要かというよりは、新しい知識や事実を1ことによって、自分のもの2が変わることがすごく楽しいわね。先生が「学びの三段階」とも言っていたことね。さっきちかさんが話していた経験がまさにこの「学びの三段階」なんじゃないかしら。皆「学びの三段階」を感じられる経験があれば、勉強についてもっと前向きになれると思うわ。

(I) 1・2にあてはまる語を次のア～カの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア 区別 イ 見方 ウ 角度 エ 知る オ 選ぶ カ 広める

(II) 〓線部「『学びの三段階』を感じられる経験」について、次の経験の中にある学びの三段階のうち、一段階目と二段階目を解答欄に合うように、それぞれまとめなさい。

【経験】

私は不思議な体験をしたよ。この間アメリカに住んでいるおばさんが子供を連れて日本に遊びにきたの。その子が私の部屋にあった『にじいろのしまうま』という絵本を見つけて、「なぜ日本ではにじが七色なの？」と聞いてきたの。その子はアメリカではにじは六色だっていうのよ。疑問に思つて調べてみたら、アメリカ以外でも、にじの色の数が違う国や地域があることがわかったのよ。今まで私が習ってきたことは、どの国でも変わらない、当たり前なことだと思つて過ごしてきたけど、文化によつて違う考え方があるのね。私もこれからは何でも当たり前だと思わずに、「なぜ？」という疑問を大切にして、何事も積極的に調べて学んでいきたいな。

